

●春日部市民文化講座（第 34 回） 「茶室の話 ーその 2」

◆日時：2020 年 11 月 21 日(土) 10 時（ばばら春日部 4 階会議室）～12 時

■茶室のドクロ

先日は、皆さんが躊躇されているなかでしたが、23 回目の「丘の上チャリティ茶会」を開催したところ 26 人のお客様がおいでになり、ぼくも、今回のお茶会では本当に勉強になりました。ぼくの席に飾ったドクロは凄かったです。あれがぼくのおもてなしだったのです。床の間に置いたドクロに哲学的な命題がちゃんとあったのですよ。それは「メメント・モリ(memento mori)」です。ラテン語で「自分が(いつか)必ず死ぬことを忘れるな」という意味の警句です。毎日、新型コロナウイルスで今日は何人が感染して、何人が亡くなったという話題の中で、お茶会をやって、あなたも私も今は健康で、お茶が好きでも、いずれは死ぬんだよ…という「自分の死を忘れるな」というメッセージがあったのですよ。でも、皆さんびっくりしたと思いますよ。床の間にドクロが置いてあったのですからね。でも、これは二番煎じで最初にやった人は一休さんなのです。京田辺市に一休寺がありますが、あそこに行くとドクロが飾ってあるのですよ。ドクロでもてなしてくれるのです。それを真似たのですね。



■自分の死を意識していた利休の侘び茶

ぼくたちは今日、こうして健康で茶室の話をさせていただくのですけれども、ぼくもいずれかは死ぬ訳で、死に対する備えというのは侘び茶のいろはのいだと思うのです。利休さんは、秀吉から死を命じられたときに、誰にも助けを求めているのですね。そして、商人なのに潔く切腹して死んでいったのです。ですから、日頃からお茶をもてなしながらも、そこには己が死を、命を一碗の中に込められていたとみていますが、どうでしょうか。何と言っても、最後の切腹の時に、見聞に来ていた弟子の侍たちに、この茶碗は誰々に、この茶杓は誰々にと言って、使った道具類を譲る先を託して、その道具で茶を点てたと思うのですが、最後の一碗を飲み干してから切腹しているのですね。利休さんの斬られた首は、京の一条戻橋に晒し首となるのですが、凄いことですよ。そういうことまで読んでいたとしたら、利休さんの侘び茶というのは洒落ではないですよ。やはり、生きるか死ぬかの戦いのなかに「利休の侘び茶」は誕生していたのです。今日の「茶室の話」には、そうしたことが見え隠れしてくると思います。

■茶室を「囲い」という

茶室のことを利休さん以前から「囲い」と呼びます。これはたぶん堺で流行ったと思います。そこに人が入って、シンプルにさっぱりとしたおもてなしをする空間を「囲い」と呼んでいて、この頃は茶室という言葉はありませんでした。堺衆あたりがきどって「囲い」と言っていたのだと思います。ここでは 3 つの茶室のことを話したいと思います。国が認めた 3 つの茶室です。その一つが「待庵」で、山崎駅前にある妙喜庵のなかにあります。ここは利休さんが造りました。もう一つが織田有楽斎が造った「如庵」で、犬山の有楽苑のなかに移築されてあります。そしてもう一つが「密庵(みつたん)」で、大徳寺の塔頭・龍光院が所有しています。これは小堀遠州が造った茶室ですが、ぼくはここだけ見ていません。

■如庵

この「如庵」は、元は京都・建仁寺の塔頭・正伝院が再興された際に建造された茶室なのですが、明治 6 年になって正伝院が、永源庵跡地に移転することになり、その際に、祇園町の旦那衆に払い下げられたものです。その後、祇園衆も持ちきれなくなって昭和 13 年に三井財閥の三井高棟(たかみね、10 代当主・八郎右衛門氏)が買い取って神奈川県大磯の別荘に移築されるのです。そして、昭和 47 年に名古屋鉄道によって買い取られて、現



写真は、上から順に「待庵」「如庵」「密庵」の内部です。



在の犬山の有楽苑に移築されるという流れを辿りました。昭和 26 年に国宝に指定されています。ぼくの先生が久田流の先生でしたので、大磯の三井家の別荘に行ったことがあるのですが、本物の茶道具でお茶を稽古させていただいたことがあります。正伝院の和尚さんから聞いた話で、明治 6 年に正伝院の「如庵」を解体して祇園衆に引き渡すときに、鱗板の後ろにある謎の三角形の中から何か仮託信仰物、例えば十字架かマリア像かは分かりませんが、**仮託信仰物**のような物が出て来たと言うのです。それを久田家の当時の宗匠が立ち会われて持って行かれたというのです。久田家というのは、表千家家元の側近中の側近です。そういうことが表千家の中で知られていて、だからお家元が「**如庵とは、織田有楽斎の洗礼名(ポルトガル語のジョアン、ラテン語のヨハネ)**と言われているが・・・」と前置きをしているのですね。だから、織田有楽斎はキリスト教徒ではなかったかと言われているのです。そうしてみると、千利休さんの周りの弟子たちはみんなキリスト教徒であり、利休さんもキリスト教といっぱい接点があったと推察されます。



■織田有楽斎と高山右近の生き方の違い

戦国武将の中で畳の上で大往生したのは、織田有楽斎だけです。有楽は逃げるのが上手で、戦場にはいつもいないのです。別な所で駆け引きの戦いをしていました。そういう生き方の人ですね。そこからすると、高山右近は真正直でしたね。戦えと言われると正面から戦って、秀吉の小田原攻めにも前田家客将として参戦して、松井田城(群馬県)、武蔵鉢形城(埼玉県)、八王子城(東京都)を攻略、クルスの旗をかざして戦っているのですね。だから、織田有楽斎と高山右近の生き方というのは、こうした戦場での戦い方、生き方に現れているのだと思います。高山右近は、**キリシタン**として自分の醜さもすべてさらけ出して生き抜いて死んでいった人です。一方の織田有楽斎はキリシタンであることを秘めて、相手と上手に交渉しながら自分をさらけ出さなかった人だと思います。

■待庵

同じ侘び茶でも、そういう違いが高山右近と織田有楽斎にはあると思うし、実は茶室にも現れたのです。本能寺の変で明智光秀が信長を殺し、秀吉が大返して山崎で光秀を打ち破るのですが、その戦勝祝いに秀吉が利休に命じて茶室を築かせるのです。それが、400 年間にわたり「**侘び茶の真髄**」と言われる茶室「**待庵**」なのですね。今はぼろぼろです。たった二畳の空間で、壁は洗い土壁、窓も何処にでもあるような土が落ちないようにしただけの窓でした。利休さんは大男だったのに、躡り口はその利休さんがやっと躡って入れる大きさで、刀も何も持ち込むことができない大きさなのです。そして、床の框は杉の丸太で、この丸太を目利きして届けたのが高山右近なのです。これが文書に残っているのです。そして、利休さんが秀吉の戦勝祝いとして、この茶室を造り、「待庵」と名付けたのです。その当時の茶の湯の常識からしたら、非常識な二畳という茶室を造り、光秀を討ち偉くなってしまう秀吉の戦勝祝いに、この土壁の庵を造った利休さんの心は何だったのだろうか、その時、ぼくは茶室「待庵」の中で考えて涙したのだと思います。利休さんの心が、ぼくの心の中にじわっと染み渡ってきたのだと思います。



■りくうの茶

天正 10 年 6 月 2 日に**本能寺の変**が起こり、信長が所有していた当時の最高とされていた茶道具、名物の唐物などが全部焼失してしまったのです。ですから、それまで常識とされていたものが全て変わっていくのです。そのため、茶道具を新しく作るしかないのです。そこで利休さんの侘びの美意識による茶室や道具組が珍重されて「**りくうの茶(利休の茶)**」と、利休さんの固有名詞で呼ばれる茶の世界が尊ばれるようになったのです。さらに利休さんが、自身の侘び茶に一番似合う茶室を造るのです。それが「**待庵**」です。道具としては、竹をさまざまな形で使うようになるのです。今、皆さんが使われる竹の茶杓、これには中間よりも少し上に節があるじゃないですか、それを定めたのが利休さんの茶杓革命なのです。しかも、利休さんは白竹の実竹(じっちく:マダケ類の、中空でない根茎が地上に出て枝葉を生じたもの)を好んで使っていました。さらに、茶杓の櫛先(かいさき:茶を掬う先端の部分)から切止(きりどめ:手元の先端部分)まで樋が通っているものを好みました。そうすると、「**真ん中の節と立てに貫く節によって十字架が描かれているのではないか**」というのが、ぼくの好きな西山松之助先生の論なのです。

■15 代樂吉左衛門さんの茶室

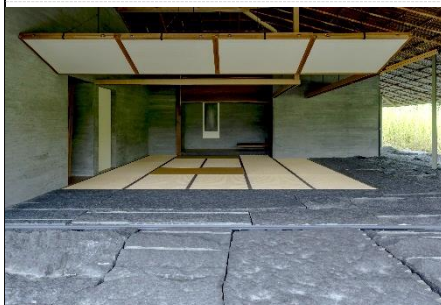
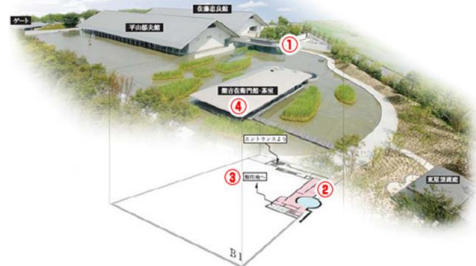
樂さんは、決して国宝の茶室を否定されているのではなく、自分の作品を置くのに適した「新しい茶室」を作りたいとずうっと思っていたのですね。2000 年には「フランス芸術・文化勲章シュヴェリエ」(フランス政府)を受章してパリに

行き新しい境地を開いたようです。皆さんもご存じのように樂さんは 2002 年頃までサイケデリックなオブジェのような茶碗を作っていたのです。主に黒茶碗なのですが、でっかくて重い茶碗です。ぼくの周りには表千家の多くの宗匠たちは「あれは茶室では使えないよな」と言っていました。ただし、話題になる頃には樂さんの茶碗一つが 1,000 万円を超えていました。そんな茶碗を作りながら、彼は「この茶碗に相応しい茶室を造りたいなあ」と思っていたら、佐川急便の社長が「そんなに言うなら、ぼくが鐘を出すからうちの美術館にその茶室を造ったら」と言われて約 7 年かけて 2007 年に完成したのが、佐川美術館にある茶室です。それは、千利休が「待庵」に相応しいと思うようなカセカセの黒茶碗を長次郎に焼かせたように、15 代樂吉左衛門さんは、自分の焼いた道具が調和する茶室を完成させたのです。それがなんとコンクリートと石の茶室です。地下に小間の「盤陀庵」があり、石組みがとても見事です。「盤陀庵」から上がると広間があって、その向こうには池の水が床と同じ高さで広がっています。池には葦の茂る浮島があります。樂さんの作品が展示された美術館を通して、地下に入り暗い小間でお濃茶をいただき、上がって池の中にある広間でお薄をいただくような趣向になっているのですね。

◆樂吉左衛門さんの茶室

樂吉左衛門館に併設されている茶室は、樂吉左衛門館同様、樂氏自らが設計の創案を行われました。当館茶室は、水没する小間と水の中に浮かぶ広間からなります。広間の床の高さは水庭の水面と可能な限り同じレベルを保つように考えられています。「水面と同じ高さに座す。人は自然と同じレベル、目線で生きていかなければならない」そういった思いが込められています。

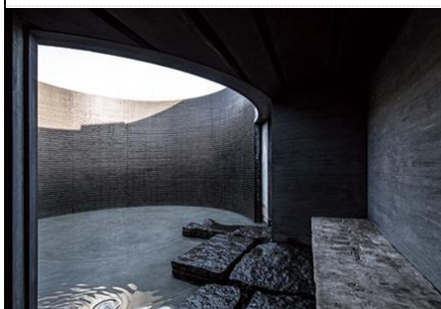
【佐川美術館／茶室見学などより引用】



水の中に浮かぶ広間「俯仰軒」



障子を下ろすと区切られた空間に



「水露地」コンクリートの壁に円く切り取られた天空と対峙しながら席入りを待つ趣向



「寄付」ほの暗い閉鎖的な空間に、鉄刀木(タガヤサン)材のテーブルやオーストラリアで使われた枕木の床



水没する茶室「盤陀庵」。天井には解体した古民家の煤竹、床柱にはバリの古材、茶室内部には越前和紙の壁が用いられている

地下にある小間には光を取り込むための窓に工夫が凝らされています。また、和紙による柔らかな光が特徴的です。彼はコンクリートに木目を付けることで、このコンクリートと石の空間に和らぎの工夫を創り出しました。広間は石の上に畳があって、その先に池が見えるという開放感あふれる茶室を造りました。こうした茶室を造って、彼の茶碗の居場所を創ってあげた訳です。直入さんが造ったコンクリートの茶室を彼自身が「この茶室は刑務所だよな」と言っているのですけれども、ぼくはそこで彼の作った茶碗でお薄をいただきましたが、空間と合っていて「やったー」と思いましたね。この空間は、牧師のぼくにもぴったりで、ハーモニーして調和していました。これは意外でした。彼は必然的に長次郎たちが、代々の家元たちが継承してきた道具に合う茶室からはみ出た道具を作ってしまったので、このぼくが作った道具に相応しい茶室を・・願っていて、それを佐川急便の社長さんが造らせてくれたのです。幸せな人ですよ。そして、何回かそこに行ってその茶室を見たり、座ってお茶をいただいてみて、もしかすると樂さんは利休さんを超えたかなという感触を持っているのですよ。

■丘の上記念会堂「在主庵」

丘の上記念会堂の「在主庵」の話をします。在主庵というのは、先日、皆さんが来て下さった丘の上教会の小間で、四畳半の茶室です。あの原型は裏千家の「今日庵」という茶室をアレンジして造ったものです。ですから、表千家の先生方が来られるとちょっと違和感を持たれるようです。ここには大徳寺瑞峯院の前田昌道さんの禅宗の哲学とぼくのキリスト教の哲学から、「在不庵(ざいふあん)、主が在らず」と「在主庵」で 1 時間くらい問答した上で昌道さんが「分かりました。仰せの通り書かせていただきます」と言って書いてくださった「在主庵」の扁額が架かっています。



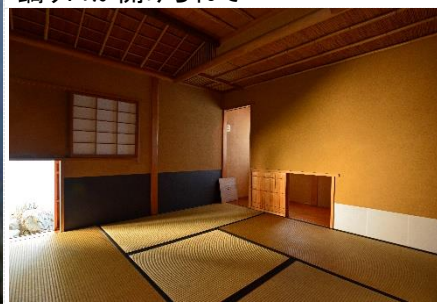
露地を下りて躍り口へ



躍り口が開けられて



在主庵の床



床前から茶室を見る



茶道口から茶室を見る

■自分を愛し、自分をもてなすように隣人を！

裏千家と表千家というのは名前の通り表裏で、「不審花開今日春(ふしんかいこんにちはる:いぶかし はなひらく こんにちはる)」という禅語があるのですね。その「不審」を取って表千家の代表する茶室が「不審庵」という名であり、「今日」を取って裏千家を代表する茶室「今日庵」があります。「不審庵」は三畳台目席で丸畳 3 枚と点前座が台目畳(丸畳の 3/4)になっている茶室です。一方の「今日庵」は四畳半の茶室です。「不審庵」は最初四畳半の茶室だったのですが、江戸時代に入って 4 代目の江岑宗左の時代になって三畳台目席になったようです。こうした茶室ができてきたのは、天正 10 年の本能寺の変により、信長が集めていたほとんどの唐物が焼失しました。それがきっかけで、利休さんの大改革的な侘び茶の変化につながっていったのです。そういうことを踏まえながら、私の「茶室」の変遷について話をしたいと思います。この「在主庵」の茶室ができるまでにいろいろな変遷があるのです。ぼくは最初に中央会堂の中の自分の住まいを改築して八畳の広間の茶室を造りました。炉も切って京間の畳を入れて造ったのですが、建て付けが関東間であったために大失敗しました。京間と関東間の寸法が違いますから、茶道具が全部ちぐはぐになってしまうのです。その後、書斎にお越しいただいた方のために、ポット型の電熱器を購入して、それで湯を沸かしてお茶を差し上げていました。電熱器が壊れたら上の部分を取り外して蓋を作り、柄杓でお湯を組み上げて今でも使っています。まさに利休百首にある「茶の湯とはただ湯をわかし茶をたててのむばかりなる事と知るべし」なのです。そうだとすると、ぼくのように電熱器で湯を沸かしてお茶を点てるのは、まさにその通りなのですね。最近では IH ヒーターの上に釜を載せて使っています。おもてなしをするということは、まずは今日の日を生かされていることに感謝している自分に対するおもてなしです。今朝もぼくは講演会の前にぼく自身に一服どうぞと言ってお濃茶を練り、お薄を点てて飲んでここにきました。おもてなしのいの一番は自分自身をもてなすことです。あなたは自分自身とのお付き合いの中で自分が好きですか？ 自分と仲良くしていますか？ これは侘び茶における大切な問いかけです。自分を大切に、自分をもてなして自分が食べる物、飲む物に対して感謝していただくことがもてなしでしょう。自分が確立していなければ侘び茶は確立しませんし、隣人をもてなすこともできないのですよ。ですから、道具はどうであろうがもてなすことはできるのですよ。侘び茶は道具に関係なく、もてなす心さえあれば成立するのですよ。お茶というのはいつでもどこでも、自分を愛し、自分と仲良くしてさえいれば、自分をもてなすように誰にでももてなすことができいいのですよ。

チャリティ茶会でのドクロに秘めた高橋先生の思い、樂直入さんの茶室のお話と面白かったですね。